

ネグレクトの行方

Consequences of Neglect

三島正英
MISHIMA Masahide

はじめに

子どもへの虐待が後を絶たない。子どもの生命の危険に及ぶ悲惨な虐待事件の報は日常となり、全国児童相談所所長会が行っている児童相談所での処理件数は、調査が開始された平成2年以降10年間にその件数は約10倍に増大し、またその後の数年間でさらにその2倍に近づいている（厚生労働省雇用均等・家庭児童局総務課 2002）。

このような状況は、「児童虐待の防止に関する法律（以下「児童虐待防止法」と略記）：平成16年10月改正法施行」の制定に代表されるように、虐待への認識が一般のものとなったことの反映とも理解されるところがあり、先の調査実態がそのまま虐待事例の増大を必ずしも意味しているわけではない。つまり、これまで水面下で行われていたことが、いわば“認識され、意識されて命名され”（斎藤、1994）、今日の調査実態へと表面化しているという側面があることも事実である。だが、それに加え、子どもへの不適切なかかわりを含めた子どもへの虐待傾向が増大してきているという認識が、識者・専門家の間ではやはり一般的であり、このような状況への認識とともに、予防、発見、介入、治療等へのさまざまな取り組みが、公的機関はもちろん、種々の民間ネットワークなどをとおして、真剣に進められてきている。

虐待という悲惨な事態は、子どもの生存を脅かすのみならず、心身の健全な発達を大きく阻害するという、あってはならない大人からの一方的暴力である。とりわけ、生命の危険にさらされる恐れのある身体的虐待の防止に向けては、なによりもまず優先的な取り組みがなされていかなければならない。だが、身体的虐待と同様に、あるいは

それ以上に注意が必要なことは、情緒的虐待あるいは養育放棄をはじめとするネグレクトの問題である。

身体的虐待は、子どもが受けたその被害が比較的明瞭であることが多く、したがって問題の所在が顕在化しやすく、またそれに伴う対処の必要性も比較的明確である。一方、情緒的虐待やネグレクトは、身体的徴候という形で虐待の実態を必ずしもわれわれの前に明らかにせず、その実態が少なからず見えにくい形で進行するとともに、その対処の必要性についても認識されにくい状況にある。

しかし、言うまでもなく、情緒的虐待やネグレクトの問題は、身体的虐待や性的虐待とともに、子どもの健康な身体発達や自我形成を中心とする精神発達への長期的影響が懸念される問題である。また実態として、児童相談所での全処理件数中、ネグレクトと分類された件数は、毎年度、ほぼ35%前後を占め、身体的虐待に次ぐ内容となっており、その対処が強く求められる課題となっている。

本稿では、筆者が専攻する発達心理学の視点から、ネグレクトが子ども、特に乳幼児の発達に及ぼす影響について考察を試みることを目的とした。幼い子どもに限るのは、養育放棄を中心とするネグレクトが、生命の存続を含め、とりわけ乳幼児の成長発達に及ぼす影響が大きいことが想定されるためであり、また、初期経験的な側面からその発達の影響を強く受けることが考えられるからである。

ヒトという存在は、Maslowが示したように、生理的欲求、身体的安全を満たすことによつての

み生きる存在ではなく、よりよき自己への達成という目的に向かって生きる存在である。その権利は、幼い頃より何人たりとも奪ってはならず、児童憲章あるいは児童権利宣言に示されるように、よりよき生へと向かって生きる存在としての子どもの環境を整えることは大人の責務である。このような大人の側の責務を果たしていくという側面からも、ネグレクトの及ぼす影響の一端について考察していきたい。

ネグレクトとは

周知のように、児童虐待防止法では第2条において、虐待を定義するにあたってその内容を身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、情緒的・心理的虐待の4種別に分けている。このなかでネグレクトは以下のように定義されている。

ネグレクト（保護の怠慢・拒否）：児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置その他の保護者としての監護を著しく怠ること。

またこの定義を受け、厚生労働省の「子ども虐待対応の手引き」（2000）ではその具体的内容を示唆しているが、ネグレクトに係わる内容は以下のとおりである。

- 例 ア) 子どもの健康・安全への配慮を怠っていることなど
- イ) 子どもにとって必要な情緒的欲求にできていない
- ウ) 食事・衣服・住居などが極端に不適切で、健康状態を損なうほどの無関心・怠慢など
- エ) 子どもを遺棄する

一方、情緒的・心理的虐待については「児童に著しい心理的外傷を与えること」と法に定義されるとともに、先の手引きでは、例として「ことばによる脅かし、脅迫、子どもを無視したり、拒否的な態度を示す、子どものこころを傷つけることを繰り返し言う、子どもの自尊心を傷つけるような言動、他の兄弟とは、著しく差別的な扱いをするなど」があげられている。

このようにネグレクトと情緒的・心理的虐待とは、概念的に相互に重複する部分があり、またその実態として、個別事例の中ではこのふたつに限らず上記の4種別が複合的な連関をもっていることも多い。したがってネグレクトと情緒的・心理的虐待との概念整理を行うことには一定の制約が生じる。そのようななかで、イワニエク(2003)は、両者を包括的に扱うなかで、類似点として「ともに、子どもの自尊心を傷つけ、達成感をくじき、人との一体感を減少させ、健康で活気にあふれた幸せな発達を妨げる、親の敵意のこもった冷淡な行動を指す」としている。また、情緒的・心理的虐待を、子どもへの親の側の極端に拒否的な行動とする一方で、それが消極的な場合をネグレクトとして区別している。

本稿では、ネグレクトのなかでも「子どもにとって必要な情緒的欲求にできていない」という側面を中心に、従来の発達心理学的知見を参照しながらその発達の影響について考察する。

ネグレクトとの関連から見た古典的発達心理学的知見

虐待という概念が一般のものとなったのは、洋の東西を問わず最近のことである。ケンプによって「被殴打児症候群」という用語が用いられたのは1962年のことであり、それ以前は発達心理学の領域に於いても、用語は別にしても、虐待という明確な視点からその影響が検討された研究はきわめて少ない。しかし、今日的視点から見た場合に、すでにネグレクトによって生じる問題が、母子関係論を中心に以前から蓄積され、指摘されていたことも事実である。

ここでは、それらのうちのいくつかの資料を簡単に再考するが、その意図は、研究が時代の影響を受けるという認識をふまえることをとおして、ネグレクトが及ぼす子どもへの影響について、より普遍的な視点を持つことを意図したためである。

1) R.A.Spitz : 「Hospitalism」

Spitzによるホスピタリズム研究は1945年に発

表された (Spitz, 1945)。ホスピタリズムという用語自体はSpitz自信が緒言で述べているようにそれ以前から存在し、当初は、施設に入所している乳児の死亡率が異常に高いことを指して用いられた用語であった。しかし、乳幼児死亡率の低下に成功した後生じてきた乳幼児の身体的・精神的・社会的発達全般の遅れの原因を探るなかから、施設入所児の新たな問題として脚光を浴びることとなった。

その内容はよく知られているとおりが、施設入所児、家庭児2グループ各2群計4グループに対して縦断観察が行われ、その間、種々の指標についてのチェックがなされた。表1は、4グループの発達指数の変化をまとめたものである。

仮に、生後1-4ヶ月の平均値算出時の生活年齢を4ヶ月に、同じく生後9-12ヶ月児の生活年齢を12ヶ月におけば、その間の生活年齢の伸びは9ヶ月になる。次にDQの算出式 ($DQ = DA / CA \times 100$) に当てはめれば、Foundling Homeの子ども4ヶ月時のDAは、4.96ヶ月、12ヶ月児のDAは8.64ヶ月となり、9ヶ月間にFoundling Homeの子どもは僅かに3.68ヶ月分の成長しか示さなかったことになる。この結果は他のグループ、とりわけ同じ施設群であるNurseryの子どもたちとの大きな違いを見せている。

Spitzはこのような差異を生じた背景を、子どもたちの出生歴や生活環境をはじめとする諸要因の比較をとおして詳細に検討しているが、その中で明らかになった要因は、配置人員の問題であった。すなわち、Foundling Homeにおいては、主任保育1名と補助介護者計5名が、45名の入所乳児のすべての世話にあたっていたのに対し、

Nurseryでは、施設側の職員としては主任保育1名と3名の補助者の配置しかなかったが、法務矯正施設附属の特性もあり、乳児の世話は母親自身及び出産のため一時的に入所している妊産婦により行われていた。これらのことから、ホスピタリズムは母性的介護の欠如によるものと結論づけられることとなった。

ホスピタリズムの現象は、母性的介護の重要さ、とりわけ初期の母性的介護の重要さを指摘する実証事例としてよく用いられるが、そこで示された子どもの特徴には、現代に言うネグレクトを受けた子どもたちとの共通点が多く認められる。たとえば、子どもたちの表情の無さなどはその典型である。つまり、非意図的なものであったにしろ、ホスピタリズムの現象は今日的視点から見ると、ネグレクトが子どもの発達全般に及ぼす影響についての問題を指摘しており、現代におけるネグレクトへの対処を考えるうえでの少なからぬ示唆を示している。

2) リップル、M：「乳児の精神衛生」

Spitzによりホスピタリズムの研究が発表される以前に、リップルは自らの小児科医としての臨床経験を背景に、乳児期の母性的介護の重要性を指摘した。その内容は「乳児の精神衛生」(リップル, 1971)として我が国にも紹介されているが、この内容にも、すでに、ホスピタリズムと同様の指摘が、ひいては、今日のネグレクトへの警告が鋭く指摘されている。たとえば、リップルは、「最良の家庭や病院でもっとも注意深く身体的に保護を受けた乳児が、しばしば消耗症 (marasmus) という、徐々に死んでいく状態に陥っていくのに対して、もっとも貧しい家庭の乳児でも、母親が

表1 縦断観察中の発達指数の変化 (Spitz, 1945)

グループ		生後1-4ヶ月間の平均DQ	生後9-12ヶ月間の平均DQ
家庭群	専門職	133	131
	一般家庭	107	108
施設群	Nursery	101.5	105
	Foundling Home	124	72

よければ、その貧乏と非衛生的な環境というハンディキャップにうちかって、元気のよい子になっていく」ことを指摘し、乳児の健康な成長・発達にとって「母親の愛情」が重要なことを説いている。また、体重の増えない子どもたちに対して、日常の措置として、看護師による愛撫を中心とした働きかけの有効性を指摘するとともに、母親自身の育てられ方によって、自分の子どもへの愛撫の仕方に差が出ることをすでに当時にして指摘し、今日に言う世代間伝達についても言及している。

3) Prugh, D.D. & Harlow, R.G. : “Masked Deprivation”

Bowlbyによるアタッチメント概念の提起以降、母子関係理論は発達心理学領域における中心的課題のひとつとして今日までさまざまな展開を示してきた。とりわけネグレクトとの関連が窺える事柄は「母性剥奪 (maternal deprivation)」(Bowlby, 1971) の概念であり、母親との関係形成とその分離による子どもへの発達の影響が種々論じられてきた。そのようななかでPrugh & Harlow (1962) は、分離によるのではなく、いわば普通の家庭 (intact family) において生じる母子関係の歪みとでも言うべき現象について言及し、今日のネグレクト問題への示唆を与えている。

Prugh & Harlowは、子どもの情緒的問題とりわけ情緒欠乏性格 (affectionless character) が生じる背景として、Bowlbyが主張した母子分離だけでは説明し得ないことを臨床的経験及び各種の統制的検証結果から導くとともに、父母ともに欠損のない家 (intact family) というだけでは子どもの健康な成長が必ずしも保証されるわけではなく、むしろ、家庭から離すことによって子どもの成長が保証されることを主張した。「隠された剥奪 (masked deprivation)」とはPrugh & Harlowによって用いられた用語であり、そこでは次の2つのタイプが指摘されている。

①歪んだ (親子) 関係 (distorted relation) :
母 (父) 親が子どもを親とは違う個人として子ど

もを見ず、子ども自信の欲求を考慮することなく扱うこと。

②不十分な (親子) 関係 : 子どもとはかかわりのない、親の心理的原因、重度の神経症的原因あるいは心理的傾向から、子どもとの暖かい関係をもつことができないこと。

これらの事柄は、①については虐待を広義にとらえたときの親の都合による権利の乱用につながり、また②は、今日のネグレクトあるいは、情緒的虐待そのものとの連関が窺えるものと言えよう。

ネグレクトあるいは情緒的虐待と関連する古典的資料について簡単な概括を行ったが、これらの文献のなかに、虐待 (abuse) あるいは今日よく用いられる子どもへの不適切なかかわり (maltreatment) という用語は見あたらない。このことは、時代の流れなかで子どもへの虐待が一般に意識される過程の理解としてその一端を読み取ることができるとともに、内容的にも今日の虐待研究への基礎資料としてこれらの研究を位置づけることができるであろう。

しかし、これらの研究のなかに認められる子ども観は、親を独立変数とし、その働きかけの結果として従属変数的に子どもの行動が決定されるという子ども観である。虐待という行為は、親からの一方的な暴力的働きかけであることが多く、従って子どもの側はそれを受動的に受ける側に立つという意味で、今日でも旧来の研究視点が踏襲されているくらいが否めないが、近年の虐待発生のメカニズムや治療過程の研究では、親子の相互作用としてこれらの問題を捉え直していく視点が強まる傾向にある (子ども虐待の予防とケア研究会 2003)。この傾向は、今後とも子ども虐待の理解と有効な対処に向けて、さらに強まっていくであろう。また、現実の虐待問題への治療的対処の有効性を高めるには、単に親子関係だけではなく、家族関係を相互のシステムとしてとらえる視点が不可欠であり、その事実から、子どもの発達理解への新たな展開が期待できるであろう。

ネグレクトのゆくえ：自己形成の視点から

虐待は子どもの健康な成長・発達に重大な影響を及ぼすことは言をまたない。虐待が子どもに及ぼす影響については、すでにさまざまな臨床報告や、それらへの概括がなされているが（例えば数井、2003）、ネグレクトに焦点を絞ったものは未だ数少ない状況である（例えば、Eckenrode, Laiard & Doris 1993、イワニエク2003）。そのようななかで、奥山（2000）は、虐待の4種別ごとに発達への影響を詳細に記述しているが、そのなかでネグレクトについては以下のような影響を指摘している

- ①愛着関係の欠乏・歪み ②基本的信頼の欠乏
- ③受容されている感覚の欠乏 ④万能感の欠乏
- ⑤発達刺激の欠乏

ここでは、奥山が指摘している事項をふまえながら、具体的にネグレクトが子どもの成長発達に及ぼすメカニズムと発達の影響について従来の発達理論（特に人格発達理論）をふまえた考察を試みる。ただしここでは発達心理学的視点からの検討を行うことを主眼とするために、「子どもにとって必要な情緒的欲求に応えていない」という情緒的、心理的なネグレクトの側面を中心に検討し、いわば身体的ネグレクトとでも言うべき「子どもの健康・安全への配慮を怠っていること」や「食事・衣服・住居などが極端に不適切で、健康状態を損なうほどの無関心・怠慢など」については、その及ぼす影響について直接的に扱わないこととした。

1) 自己形成への影響：「信頼」の獲得の視点から

虐待4種別一般に言われることであるが、虐待が自己形成に及ぼす影響は計り知れない。とりわけネグレクトと情緒的・心理的虐待については自尊心、自己評価、自己有能感等々自己を形成するすべての側面に甚大な影響を及ぼすことが指摘できる。

たとえば、エリクソン（1977・80）は、人格形

成にあたり各ライフサイクルには心理社会的危機が存在することを想定している。そこでは当初の家族を中心とした人間関係から、徐々にその範囲が空間的・心理的に拡大し、さまざまな水準での他者とのやりとりのなかから青年期の自我同一性への準備がなされていくことが想定されている。その出発点は乳児期の「信頼 対 不信」と定式化された課題であり、そこでは、母親的存在との相互交渉のなかからどちらに傾いた態度が構築されるかが問題となる。

エリクソンがここで言う「信頼」とは、いわば、自らの存在が、自らが生活する社会から受け入れられているという基本的信頼であり、このことを出発点として人格形成はスタートすることが想定されている。このことは子どもの臨床的観察からみて、きわめて妥当な見解であろう。たとえば、乳児は不安に際して必ず信頼できる人への愛着をベースに行動する。人見知りの際は母親の胸に顔を埋めて泣き、あるいは母親から離れて歩き出すときは、必ず自らの不安を打ち消せる距離を測って母親の存在を確かめる行動を示す。

翻って基本的信頼が揺らいだとき、子どもはその信頼を確認するかのようにそれまで基本的信頼をおいてきた対象（母親）への依存を示す。たとえば、弟妹の出生によって、自らの依存欲求が満たされないとき、子どもは退行的手段によってかつての信頼関係への回帰を試みる。

これらの例に示されるように、乳児期の行動発達を規定するのは、身近な存在に対し基本的な信頼関係が築かれることであり、それをBowlby（1971）は愛着（アタッチメント）と命名した。Bowlbyによれば、そのような関係がモデル（内的作業モデル：inner working model）となり、その後の対人関係の基礎となることが想定されているが、Bowlbyが想定したように母親が決定的な役割を果たすか否かについてはともかく、子どもの成長のあらゆる側面について、その出発点において周囲の大人への基本的信頼関係を築き上げることの重要性については、基本的な合意ができるものと言えよう。

これらのことをふまえたとき、ネグレクトをはじめとする親の虐待が及ぼす影響についてどのようなことが想定されるであろうか。

ネグレクトあるいは情緒的虐待による不安定な愛着関係は、子どもの依存欲求を満足させず、自らが守られていないという不安は、幼い子どもにして自らの殻に閉じこもるか、あるいは、自らを自らが守るという手段を取らせるしか他に方策はないであろう。その結果、常に緊張した状態におかれた子どもは、極度のストレス状態のなかで些細な刺激に過剰に反応してしまい、そのことが親の怒りや拒否的感情を強めてしまい、またそれによって親側からの暴力やネグレクトを引き起こすという悪循環へとつながりかねないであろう。愛着障害として知られる一群の症候は、このようなメカニズムのなかから生じてくることが知られているが（才村、2003）、ネグレクトによる成長・発達への否定的影響として、以上のような自我形成の出発点における問題が先ず指摘できる。

このことはエリクソンの指摘する乳児期以降の心理社会的危機課題についても同様に当てはまる。エリクソンは、幼児期前期に「自立 対 恥」、幼児期後期に「自主 対 罪悪感」そして児童期に「生産 対 劣等」という心理社会的危機を想定した。これらは先立つ乳児期の「信頼 対 不信」と連動するが、乳児期に獲得された他者との関係における「不信」は、幼児期前期や後期に獲得されることが期待される、「自らの行動を自ら律することができ、また自らが行動の主体である」という、自己形成の基層部分となる側面への否定的側面を獲得することが懸念されることとなる。

また、児童期における課題に指摘される内容の本質は、それまでの自己形成の基層部分を背景に「自らへの自信・自己有能感」を育むことであるが、被虐待児の特徴として指摘される自己評価の低さは、まさにこのこととも関連しており、ネグレクトをはじめとする虐待体験が自己形成に及ぼす影響は計り知れないと言うことができよう。

2) 自我形成への影響：「不信」の対象すらない視点から

ネグレクトの結果が、子どもの基本的信頼や愛着の形成に影響を及ぼし、すでに幼い頃から否定的自我の形成へと展開する危険性についてみてきた。イワニエク（2003）によって指摘されたように、ネグレクトと情緒的虐待に共通する内容である「敵意のこもった冷淡な行動」を親から日常的に示される場合には、上述したように、自らが生活する身近な人たちを中心とする社会への不信と、ひいては自らの存在への不信が育まれていくおそれが想定され、ネグレクトの行方として、このことがなによりまず強調されることとなる。

しかし、現代の子ども虐待の状況、とりわけネグレクトの問題については、新たな状況の進行と、そのことへの認識にもとづいた新たな対応が求められているように感じられる。それは、決して意図的ではなく、また敵意に基づくのではなく、しかし、結果として冷淡なかかわりしかない、文字どおりそこに親子が存在しないかのような空虚な親子関係にもとづくネグレクトの現象である。敵意による冷淡さを背景にしたネグレクトを積極的ネグレクトとするなら、このようなケースは消極的ネグレクトと呼ぶことも出来よう。

このような形のネグレクト、とりわけ、具体的には養育放棄を中心とする子育てへの無関心は、少なからず過去から存在した。先に見たように Prugh, D.D. & Harlow, R.G (1962) の Masked deprivation の概念は、まさに現代のネグレクト状況を指摘しており、とくに、親が精神に病を得る事態の中では、従来から認められてきた事例である。また、ギル（1991/1997）は、精神的に疲弊し、時として子どもが存在していることすら意識しなくなっている親の事例を紹介している。

しかし、近年の虐待傾向が、無知や貧困を中心とした社会病理型の虐待から、育児不安・ストレスに起因する神経症傾向を中核とする家族病理型の虐待へと変化する中で、ネグレクトについても同様にその傾向が当てはまり、そのなかで、先述したような消極的ネグレクトによる新たな問題が

生じはじめている。

それは、ネグレクトの中でも空疎な親子関係により、「不信」の対象すら周囲に持ち合わせずに育っていく子どもの問題である。発達初期の「不信」の経験は、もちろん決して望ましいことではなく、出来る限り避けるべき経験であろう。常に「不信」を経験する子どもは、愛着障害をはじめとする不適応行動へのリスクに曝されている。だが、たとえば、日常的な敵意や冷淡さを与えられることにより、たとえそれが「不信」であったにせよ、その対象となる親や他者への一貫した対処の仕方や他者モデルをそのなかから創り出すことが出来る。

一方、決して意図的でもなく、また敵意に基づくのではなく、しかし、結果として冷淡なかかわりとなってしまっている空疎な親側からの働きかけに対して、子どもはいったいどのような他者への態度を創り出せばよいのであろうか。そこでは「不信」を向ける相手すらなく、相互性を失ったものとして体験される内容は「苦悩」あるいは「危惧」（ギデンス、1993）であり、そのようななかでは、ただ“混乱”のみが延々とつづく事態が待ち受けるのみであろう。そしてこのような周囲の大人との関係の帰結として、子どもたちのなかにもどのような自己が生み出されて行くのであろうか。抑鬱状態、不安症状、無差別的な愛着傾向など、ネグレクトをうけた子どもの示す諸々の行動は、明確な自己を生み出す基礎となる自己への意識すらない空疎な自己が形成されていく過程の症状を象徴しているようにのみ感じられる。

自我は他者とのかかわりによって鍛えられ、磨かれていく過程である。幼い頃は家族を中心としたかかわりのなかから、そして幼児期から児童期へとすすむ過程では家族に加えて仲間との関係のなかから基礎づくりがなされていく。いずれの過程においても、他者との関係がきわめて希薄になる傾向が強まっている現代社会のなかで、無意図的ネグレクトの及ぼす子どもたちの自己形成への影響について、今後の検討が待たれるところであろう。

おわりに：初期経験との関連から

ネグレクトの行方についてその一端を考察してきた。最後に残るのは、ここまでみてきた発達初期の被虐待（ネグレクト）経験の永続性の問題であろう。すなわち、これまで見てきたように、ネグレクトを中心とする被虐待経験が子どもの人格形成に影響を及ぼすとしても、その影響がその後の人生を決定づけるか否かという問題である。

初期経験が発達に及ぼす影響については、すでに一定の結論が得られているが（例えば浅見1975、藤田1995）、この問題を検討するうえで参考になる事例が我が国でも報告されている（藤永他1987）。この事件は1972年に関東地方のある小さな町で発生した。当時、年齢6歳と5歳になると思われる姉弟が、およそ1年9ヶ月にわたって戸外の小屋に放置され、近所の人から現在で言うネグレクトとして通告され、その後10年間余りにわたって治療的追跡が行われ、その記録がまとめられたものである。その一端を紹介すると、発見当時6歳、5歳であったにも関わらず、当初、乳児院に収容されたことに象徴されるように、身体的成長が著しく遅れており、ネグレクトによる身体的成長への著しい影響があったことがみとれるとともに、精神発達においても、きわめて大きな遅れが認められていた。藤永が述べているように、当時の初期経験論をふまえれば、この子ども達の回復についてはきわめて否定的な予測がたてられた。しかしその後の心身両面にわたる総合的な支援により、両者とも普通の水準にまで回復したことが報告されている。

この事例に示されるように、ヒトという種はきわめて環境に対して柔軟で、可塑的な発達の可能性を秘めた存在である。虐待という過酷な経験を経たとしても、それによってその後がすべてについて決定されるわけではない。身体的虐待をはじめとする心的外傷体験が、例えばギル（1997）のポストトラウマティック・パイセラピーをはじめとする治療的手段によって回復が図られる一方で、身体的、性的虐待とは全く異なる影響が懸念されるネグレクトへはどのような治療・対

処方策が求められるのであろうか。

自己形成の未熟な乳幼児期の子どもにとっては、まさにネグレクトされているという事実すら意識できない状態にあるであろう。そのような状況のなかで、よりよき生を保障するのはわれわれの大人の責務であり、その改善に向けてウイントン&マラ (2002) が指摘するように、多領域の協働的な取り組みが予防、発見、介入そして治療の各過程において必要であろう。とりわけネグレクトを受けている子どもにとっては、自らを取り巻く人と環境が信頼できるものであり、そこで毎日を安らぎのなかで暮らせる環境を保障することこそが、なににも増して必要なことであり、またその過程こそがなよりの治療的効果をもつであろう。その側面から、小舎制への移行をはじめとする児童福祉施策の今後の展開について、今後の実証的な検討を行っていく必要があるであろう。

参考文献

- 浅見千鶴子 初期経験 依田新監 新・教育心理学事典 1975 金子書房
- Bowlby, J. 1971 Attachment and loss Vol.1 Attachment. Penguin Books.
- Eckenrode, J.H., Laiard, M. & Doris, J. 1993 School performance and disciplinary problems among abused and neglected children. *Developmental Psychology* 29, 53-62
- エリクソン E. (仁科弥生訳) 1977・80 幼児期と社会 I・II みすず書房 (Erikson, E. 1950 Childhood and society. New York : Norton)
- 藤永保他 1987 人間発達と初期環境 有斐閣
- 藤田和生 1995 初期経験 岡本夏木他監 発達心理学事典 ミネルヴァ書房
- ギデンス, A (松尾精文・小幡正敏 訳) 1993 近代とはいかなる社会か 而立書房 (Giddens, A. 1990 The consequences of modernity. PolityPress)
- ギル, E (西沢 哲訳) 1997 虐待を受けた子ども
- ものプレイセラピー 誠信書房 (Gil, E. 1991 The healing power of play. New York: Guilford Press)
- イワニエク, D. (桐野由美子監訳、麻生九実訳) 2003 情緒的虐待／ネグレクトを受けた子ども 明石書店 (Iwaniec, D. 1995 The emotionally abused and neglected child. New York : Willey)
- 数井みゆき 2003 子ども虐待—学校環境にかかわる問題を中心に— 教育心理学年報第42集 148-157
- 厚生労働省雇用均等・家庭児童局総務課 2002 平成13年度児童相談所における児童虐待相談処理件数
- 厚生労働省 2000 子ども虐待対応の手引き
- 奥山真紀子 2000 児童虐待と心のケア—母子保健情報 42 恩師財団母子愛育会
- Prugh, D.D. & Harlow, R.G 1962 “Masked deprivation” in infants and young children. Public Health Paper , No14 Deprivation of maternal care. Pp.9-29 WHO
- リップル, M.A. (津守 真・野田雅子訳) 1971 乳児の精神衛生 (Ribble, M.A. 1943 The rights of infants. New York : Columbia Univ. Press)
- 才村 純 2003 虐待の実態 子ども虐待の予防とケアのすべて 子ども虐待の予防とケア研究会 第一法規
- 斎藤 学 1994 児童虐待 金剛出版
- Spitz, R.A. 1945 Hospitalism. The psychoanalytic Study of the Child Vol.1, Pp.55-74
- ウイントン, M.&マラ, B.A. (岩崎浩三訳) 2002 児童虐待とネグレクト 筒井書房 (Winton, M.A. & Mara, B.A. 2001 Abuse and neglect : Multidisciplinary approaches. Allyn & Bacon)

Summary

To inquire the consequences of neglect, some theoretical considerations were attempted. Following the definition of neglect, some classical researches of developmental psychology, such as Hospitalism and Masked deprivation, were reviewed from the point of neglect. Ascertaining that those researches clearly indicated the similarity of neglect and concerned problems, though we could not find the term "neglect", the significances of those researches were briefly summarized. The consequences of neglect were examined from Erik-

sonian point of view. The most serious damage estimated was the influence on children's formation of ego, especially in the case of children have no (maternal) object to whom they can attach, because they could not form neither dependence nor insincerity. Finally, the long term influence of neglect on child development was considered and the plasticity of human being was emphasized.

Key Word

neglect, abuse, maltreatment, child, development